

☆復活節第4主日(5月3日)の聖書朗読☆ ※主任司祭からの解説があります。

**第一朗読 (使徒たちの宣教 2章 14a, 36~41 節)**

五旬際の日、ペトロは十一人と共に立って、声を張り上げ、話した。「イスラエルの全家は、はっきり知らなくてはなりません。あなたがたが十字架につけて殺したイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」人々はこれを聞いて大いに心を打たれ、ペトロとほかの使徒たちに、「兄弟たち、わたしたちはどうしたらよいのですか」と言った。

すると、ペトロは彼らに言った。「悔い改めなさい。めいめい、イエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。この約束は、あなたがたにも、あなたがたの子供にも、遠くにいるすべての人にも、つまり、わたしたちの神である主が招いてくださる者ならだれにでも、与えられているものなのです。」

ペトロは、このほかにもいろいろ話をして、力強く証しをし、「邪悪なこの時代から救われなさい」と勧めていた。ペトロの言葉を受け入れた人々は洗礼を受け、その日に三千人ほどが仲間に加わった。

**第二朗読 (ペトロの手紙Ⅰ 2章 20b~25 節)**

愛する皆さん、善を行って苦しみを受け、それを耐え忍ぶなら、これこそ神の御心に適うことです。あなたがたが召されたのはこのためです。というのは、キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。

「この方は、罪を犯したことがなく、その口には偽りがなかった。」ののしられてもののしり返さず、苦しめられても人を脅さず、正しくお裁きになる方にお任せになりました。そして、十字架にかかって、自らその身にわたしたちの罪を担ってくださいました。わたしたちが、罪に対して死んで、義によって生きるようになるためです。そのお受けになった傷によって、あなたがたはいやされました。あなたがたは羊のようにさまよっていましたが、今は、魂の牧者であり、監督者である方のところへ戻って来たのです。

福音朗読 (ヨハネによる福音書 10章 1~10節)

そのとき、イエスは言われた。「はっきり言っておく。羊の囲いに入るのに、門を通らないでほかの所を乗り越えて来る者は、盗人であり、強盗である。門から入る者が羊飼いである。門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける。羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す。自分の羊をすべて連れ出すと、先頭に立って行く。羊はその声を知っているので、ついて行く。しかし、ほかの者には決してついて行かず、逃げ去る。の者たちの声を知らないからである。」イエスは、このたとえをファリサイ派の人々に話されたが、彼らはその話が何のことか分からなかった。

イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。わたしより前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。わたしは門である。わたしを通過して入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草を見つける。盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならない。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。

朗読解説 一主任司祭より皆様へ一

足立教会の信徒の皆さまこんにちは。GWの真ん中の日曜日ですね。いかがお過ごしですか。新型ウィルスの感染が広がっているとは思えないような、すばらしい季節になりましたね。植物を初め多くの生き物たちはこの季節のエネルギーを身に受けて、創造主である父なる神の恵みを浴びて輝いていますね。もちろん私たち人間にもこの恵みのエネルギーは届けられています。あとは私たちがそのエネルギーを感じて感謝できるかにかかっています。私たちの霊的な感度を強くしましょう。それにはいたるところにおられる神さまを自然の中、人々の中そして何より私の中に見つける努力をすることでしょう。ここまで生きてきた中で主イエスに出会った瞬間があるはずですよ。それはいつどこで誰によって・・・と心の中で振り返ることです。人との接触を避けなければならない今こそできることではないでしょうか。

さて、今日は復活節第四主日です。第一朗読は「使徒たちの宣教」、第二朗読は「使徒ペトロの手紙」、福音朗読では「ヨハネによる福音」が読まれます。

**第一朗読** （使徒たちの宣教 2章14a、36～41節）

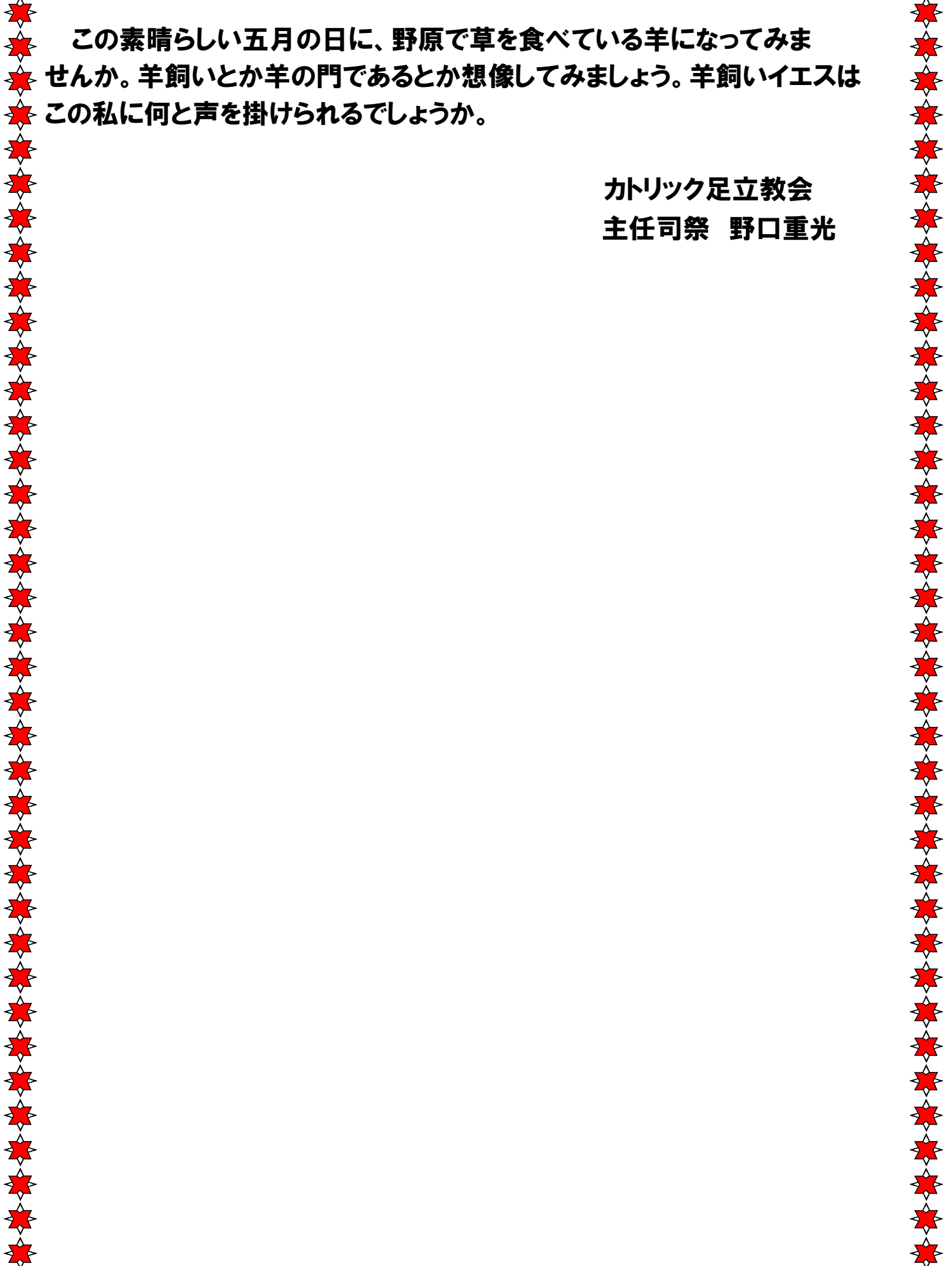
ここでは五旬祭の日に、使徒の頭であるペトロが大胆に、勇気をもってイスラエルの人々に「あなたたちが十字架につけて殺したイエスを神は主とし、メシアとなさった」と声を張り上げて話したのです。イエスの受難とその復活を身を持って体験したペトロは、誰かに指図されたわけでもなく、心の動くままに活動を始めました。

**第二朗読** （ペトロの手紙Ⅰ 2章20a～25節）

ペトロは使徒言行録ではエルサレムにいたユダヤ人たちに主イエス居えすが 復活したメシアであると宣言していますが、この手紙ではより多くの信徒の方々に、特にユダヤ教以外の方々に主イエスがメシアであると告げています。また、「主イエスは十字架にかかって、自らその身に私たちの罪を担ってくださいました。それは私たちが罪に死んで、義によって生きるようになるためです」と言っています。ペトロは主の死と復活の生き証人としての強みを存分に発揮して宣教しているのです。

**福音朗読** （ヨハネによる福音書 10章1～10節）

羊の話です。旧約聖書の中には神様から呼ばれる前は、羊を飼っていた人の話がいくつか出てきます。例えばダビデ王。それほどにこの地方の人々にとって羊の話は日常的でなじみのある題材なのです。羊飼いは羊のことをことごとく知っており、また羊も自分の主人は誰であるかをよく知っています。この関係性をイエスは神と人間の間柄に当てはめられるのです。日本語で言えば「阿吽の呼吸」とか「以心伝心」の仲とでもいうのでしょうか。



この素晴らしい五月の日に、野原で草を食べている羊になってみませんか。羊飼いと羊の門であるとか想像してみましょう。羊飼いやイエスはこの私に何と声を掛けられるでしょうか。

カトリック足立教会  
主任司祭 野口重光

